

徴だと思われる。

II 交友関係のちがい

いずれのグループも、追従される子（この遊びではリーダー的な子）が一人でなく数人いること、そしてその追従される子と追従する子のつながりはあるが、追従されるもの同志の結びつきが少ないことが目立った。

言語グループは行動グループより弱く結びついており、行動グループはやや一人の追従される者にまとまって結びつきがあったようだが、いずれも交りの広がりには小さくむらがあった。これは追従的幼児の交友関係の特徴ではないかと思われる。

しかし二学期終ごろより積木の場では自分の意見が持て自分を主張できるようになり、追従するもの、されるものも、一つになって遊べるようになった。

これは抵抗の少ない積木遊びが媒介になったからだと思われる。

指 導 追従的な幼児は、追従していても不満でなく、たのしんでいるというところは見のがせない。その上自信がなく消極的で劣等感を持っていると思われる。そこで、

追従的な幼児集団の積木あそびは上手な指導、誘導が特に必要であり、指導に乗ってくる時期を注意ぶかくみきわめなければならぬ。

追従的幼児も指導に乗って来る時期もあった（一月中旬頃）が貧弱だった。

今までの外向内向、ボス的な幼児の研究の時のように能力に差のある子の指導は時と場をまちがえなければかなりの指導は成功したが、追従的な子は、強い指導では遊びがかえってこわれてしまい弱すぎて効果がないとゆうことを一年間の研究で何回も味わった。

そこで

追従的なグループ集団の子どもたちは注意ぶかく、たんねんに指導し指導にのるときを適かくにつかまえないければならぬと強く感じた。指導さえまちがえなければ今までの研究の内向的な子、外向的な子、ボス的な子の、リーダーより、追従的な幼児の方が、非常によいリーダーになれる、民主的なリーダーになれる子どもたちだと強く感じた。

積木での交りが、そのまま他の活動にも適用できたのは今年の追従的な幼児たちで、今までにないすなおな友だちのうけ入れ方をしていたと思う。

この追従的な幼児の積木遊び及び、他の活動をしっかりとみつめ（科学的に）積極的、民主的リーダーになれる子にしていきたいと考える。（大会抄録84～90頁）

社会性の過成熟児と

未発達児の比較研究

神戸市立垂水幼稚園	陸 井 陽 子
魚崎幼稚園	井 藤 尚
西郷幼稚園	奈 良 欣 子
島 崎 公 子	島 崎 公 子

研究のねらい

幼児教育の重要な目標のひとつに、社会性を養うことがあげられるがこの目標を達成するためには、その対象である幼児の社会性発達の実態を把握することが必要であることはいうまでもない。幼児

の社会性発達には、家庭環境が大きく影響するといわれるが、実態は知られていないので私達は、幼児の社会性発達と親の養育態度との間にはどのような関係があるか、また家庭環境との間に何らかの関連性があるかを明らかにしようとして共同研究を行なった。

研究の方法

(1) 方法 私たちの4園の1年保育児男女計六一〇名に教研式社会性発達検査を実施し、S Qの平均値、標準偏差を算出しこれに基づいて社会性成熟度を5段階に分けた。その結果S Q一二四以上のものを過成熟児群とし、八五以下のものを未発達児群としてえらび出した。その数は、過成熟児群では男児一〇名、女子一七名、計二七名で未発達児群は男児一六名、女児一三名、計二九名である。これら兩群に田研式親子関係診断テスト、家庭環境調査を実施し比較考察の対象とした。

(2) 期間 S三五・九、教研式社会性発達検査実施 S三五・一〇、田研式親子関係診断テスト施行 S三六・一、家庭環境調査(二〇項目)実施。

研究の結果

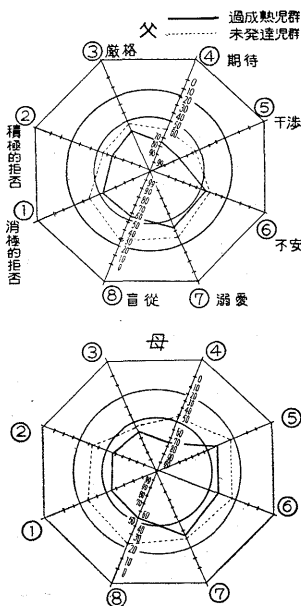
- (1) 全児童のS Qおよび項目別得点について
- ① 全幼児六一〇名のS Qの平均は一〇四・四、標準偏差は一・七六となり、全体のS Q分布をみるとS Qの高い方にずれていた。即ち4園の園児の社会性成熟度は全国標準の上位に位置していることがわかった。
- ② 項目別に平均してみると第1表のようになる。これを全国標準に比較してみると①②③の面では3(中)の段階にあり、④の面は2(中)の段階にあることがわかった。
- ③ また性別による差があるかどうかをみるために、対象児の

中から無作為抽出法により男児一九七名、女児二一九名をぬきとって比較してみた。その結果は第1表のように、S Q①④の面では女児の方が男児よりもまきっていた。②③の面では差が認められなかった。

(2) 親子関係診断テストの結果からみた過成熟児と未発達児の比較は、左の図のようである。

(3) 家庭環境調査の結果からみた過成熟児と未発達児の比較 つぎに家庭環境調査の項目について、兩群の間に有意な差があるかどうかを χ^2 検定を用いて検定した。その結果殆んど差のみられない項目はつぎのものであった。

ア 家庭でどんな遊びがすすみますか



第1表 社会性成熟度テスト成績

項目	別平均点	男女別平均点	
		男	女
S	Q	104.4	106.1
①	自律性	14.7	15.5
②	対人関係	14.4	14.8
③	言語常識	16.8	16.5
④	仕事作業	15.8	17.5

イ いつも遊んでいる友達は何人位か
 ウ 子どもを甘やかしている人がいるか
 エ 子どもにきびしい人がいるか
 オ 家族そろって食事をするか
 カ 近所と親しくつきあっているか
 キ 隣近所にくらべて人の出入が多いか
 ク テレビのよい番組はみせているか
 ケ 子どもの持物を整理する場所があるか
 また、両群の間で有意の差が認められたのはつぎの項目であった。
 (○)は5%以下の危険率で◎は1%以下の危険率で有意なものを示す)

ア おこづかいを毎日与えているか(○)

与えていない方が過成熟児に多い

イ 家庭での躰はどうしているか(◎)

きびしく躰けているかと思っている方が過成熟児に多い

ウ 近所の友達と遊ばせますか(○)

えらんで遊ばせる方が過成熟児に多い

(4) 離乳期および初歩期との関係について

離乳完了の時期、歩きはじめの時期を調査し、比較してみると過

成熟児の方が早い。

(5) 結論

① 全体的にみて都会地では社会性の発達が進んでいるように思われる。

② 親の養育態度が幼児の社会性発達に影響することが明らかになり、特に親の盲従的態度、拒否的態度が社会性発達によくない影響をおよぼすようである。

③ 二〇項目からなる家庭環境調査を行ない社会性発達との関連性をみたが、親の養育態度を示すと思われる3項目において関連性がみられただけで、その他の項目についてはみられなかった。

④ 親の養育態度が幼児の社会性の発達に影響することが明らかになった以上、幼児の社会性の円満な発達をすすめるためには、園におけるよい指導が必要なのはもちろんだが、両親の協力を得ることも大切であり、家庭においてよい養育態度をとってもらおう両親教育をおこなうことも必要であろう。

⑤ 特に社会性の未発達児には、両親の理解、協力を得ることが必要であるが、過成熟児にも適切な指導が必要であろう。

(大会抄録91~94頁)

社会性指導の問題 (第二報)

(社会的成熟度と社会距離点との関係について)

名古屋市立保育短期大学 成 田 錠 一

上名古屋保育園 石 田 妙 子

研究の方向

社会性指導の問題を考えるに当って我々は、十三回大会発表のごとく社会性をその発達の側面と教育的側面とに分けて考えることにした。そして前者は社会能力検査とか成熟度尺度によって客観的に総合的にとらえうると考えた。また後者は正しい指導目標への到達の度合によりとらえた。目標への到達度は代表的な保育場面を三つ選び、それぞれサブゴールを用意し、五段階評定により評定しその